

特色G Pシンポジウム「特色G Pの学生支援に果たす役割」で見えたこと

教員養成G Pプロジェクト・准教授

吉村 雅仁

4年間に及ぶ奈良教育大学特色G Pの総括の一つとして、平成18年12月9日、本学大会議室においてシンポジウム「特色G Pの学生支援に果たす役割」を開催しました。本学の森本教授による奈良教育大学特色G Pの紹介に引き続き、同・上野ひろ美教授をコーディネーターとし、特色G P選定大学である北海道大学、関西大学、福井大学から参加いただいた安藤厚（北海道大学）教授、芝井敬司（関西大学）教授、松木健一（福井大学）教授から各大学における取り組みの紹介、さらに、キャリア・デザインの視点から教育実践を行っている小樽商科大学から招いた岡部善平助教による各取り組みに関するコメントという内容です。

シンポジウムの全体進行役をしながら各大学の取り組みを聴き、学生支援、教育改革について自身見えてきたことが二つあります。第一に、どの取り組みも学生が見通しと目的意識を持ち、大学の学びに取り組みめるよう支援する試みであるこ



取り組みを紹介する森本教授

と。第二に、こうした「良い取り組み（G P）」を実施するためには、大学スタッフの組織作りと地域との連携が必須となることです。本学がこの二点から学ぶことは多いと思われま

■ 大学での学び方

第一の点に関して、北海道大学はそのコア・カリキュラムにおける目標を「高いコミュニケーション能力」「社会・文化の多様性の理解」「思考力・批判能力」「社会的責任と倫理」とし、「牧場の教室」や「船上の教室」など大学の資源を有効に利用した体験学習に加え、少人数討論、課題中心学習等の手法を通じて大学での学び方を学ばせることを試みています。関西大学は、ビジネス・インタラシップの蓄積を応用し、大規模な学校インタラシップを実践してきており、教職版のキャリア・デザインに留まらず、大学生全体の精神的、社会的な成熟を促す「実践型学外教育の大規模展開」をその柱の一つに据えています。このプログラムは、学生たちに対し、何のために大学に来て学ぶのか、ということ、どのように大学が彼らに伝えるのか、という意味において極めて大きな役割を果たしているそうです。福井大学は、教師を高度な専門職と規定し、「地域との協働」と「実践的教員養成」とを柱とした実習プログラムを展開してきています。これは単に地域の協力を得ながら長い実習を行うというのではなく、学部教育と現職教育の両方を担う地域の教育センターとしての役割を大学が担うこと、すなわち地域と協働しながら学生

を育て学校を変えていくことを目指すものであるようです。とりわけ学生の教育に関して言うと、長い実習中の理論と実践との溝をケース・スタディで埋めるという工夫がなされています。

■ 組織作りと地域連携

第二は、小樽商科大学からの指摘通り、大学教育を変えるプログラムはどの大学においても大学スタッフの組織作りと地域との連携とが鍵であるという点ですが、いずれの大学においてもごく限られた人員が周りのスタッフを何らかの方法で巻き込み、なおかつ地域との連携を構築する苦労がよく理解できました。北海道大学においてはクラク博士からの理念の基に教員の理解を得てきたり、関西大学においては半強制的に学部の3分の1の教員一人ひとりに担当校を割り当て実際に向いてもらう措置をとったり、福井大学では地域の学校に極めて多くの学生を支援目的で派遣する形をとってきているそうです。

■ 今後の課題

以上二つの点を参考に、本学も少しでも多くの大学スタッフで、少しでも広い地域との協働体制を整えながら、導入科目群、カリキュラム・フレームワーク、教育実践演習、教員養成G P、教職大学院構想、そして地域学校支援等の一見独立した様々な取り組みを融合させ、学生や地域にその見通しが明確にわかる形にすることがこれからの課題になると思われま